

■ 論 文 ■

地方花柳界における〈芸〉と〈色〉

－ 諏訪湖沿岸地域の事例 －

谷 岡 優 子

(関西学院大学大学院社会学研究科博士課程前期課程)

■ 要 旨 ■ 日本各地には、前近代、もしくは近代以降に形成・展開されてきた花柳界が存在している。しかしながら、これまでの花柳界研究は、京都と東京を対象としたものがほとんどであり、地方の花柳界を対象とした研究はあまり行なわれていない。

本稿は、長野県諏訪湖沿岸部に位置する上諏訪、下諏訪、岡谷、茅野をフィールドに、花柳界の変遷、とりわけ〈芸〉と〈色〉という二元的構造が売春防止法施行以前と以後でどのような変化をたどったかを明らかにする。

■ キーワード ■ 地方花柳界、芸妓、芸、色、諏訪湖沿岸

1. 問題の所在

日本各地には、前近代、もしくは近代以降に形成・展開されてきた花柳界が存在している。しかしながら、これまでの花柳界研究は、京都と東京を対象としたものがほとんどであり、地方の花柳界を対象とした研究は、あまり行なわれてこなかった。

わずかに存在する地方花柳界研究としては、都市空間における花街と遊廓の差異やその変遷を地理学的に研究したもの（加藤 2005）や新潟市古町を事例に花街における新たな取り組みを分析したもの（澤村 2012）がある。しかし、花柳界内部のしくみや盛衰について、関係者の語りを分析したものは存在していない。

近年、『地方都市の暮らしとしあわせ 高知市史 民俗編』（高知市史編さん委員会編 2014）は、高知市をフィールドに、売春防止法施行後の市内赤線（玉水町）、青線（掛川町）両地区の様子やその後の変化、そして高知を代表する料亭の一つ「濱長」の変遷と花柳界の再活性化、「土佐芸者」などについて記述している。

また、このなかで、民俗学者の島村恭則は、「花柳界とは、芸妓（歌舞・音曲によって酒宴に興を添える女性。芸者ともいう）、料亭・料理屋（高級日本料理店）、検番（芸妓の派遣等を仲介する事務所）、置屋（芸妓を派遣する業者）、芸事（三味線、踊り等）の師匠などからなる社会」であり、また、「これが特定の空間で展開される場合、その空間は「花街」と呼ばれ」と定義している（島村 2013: 92）。本稿の記述はこの定義に則ってすすめる。

各地の地方花柳界は、そのしくみや実践、地域文化との相互関係などにおいて、京都や東京などの花柳界とは異なる独自の多様性と変遷を有している。

この場合、地方花柳界は、その地域の上位階層である「旦那衆」に支えられた社会であることから、地域の経済のあり方とも密接な関係にあり、また、民謡の再編など地域文化形成においても深い関わりが見出される。こうした地方花柳界の研究は、地方都市の社会・文化のあり方を立体的に究明する視点として、一定の有効性を有しているとともに、京都・東京中心に構築されてきた日本の花柳界像について再考する契機となると考える。

ところで、かつて各地の花柳界には、〈芸〉を売る「芸妓」と〈色〉を売る「娼妓」という、異なる役割を持つ女性たちがおり、この両者の境界は、時代、地域、そして個人の意思等によって、多様かつ流動的なあり方を示していた。

このことについて、浅原須美は、著書のなかで、「体売る娼妓と、芸を売る芸妓は明確に区別され、娼妓の生きる色町と芸妓の生きる花街は、まったく別の世界であったのである」（浅原1996）と述べている。

しかし、文化地理学者の加藤政洋は、浅原の「色町」と「花街」を分断した区分は、東京の花街に顕著な特徴であり、その他の都市に必ずしも当てはまるわけではないと触れ、「花街」を「芸妓」の所在（営業）する場所であるとして、花街すべてが遊廓というわけではないにしろ、芸妓と娼妓の混在する花街が各地に存在したことを踏まえれば、遊廓を花街の一種と考えるのは場合によっては間違いではなく、また完全に排除するわけにはいかない」（加藤2005:7-8）と述べている。

加藤の指摘は、芸妓と娼妓の混在する地域を対象とした見解であるが、芸妓が活動する花街の内部においても、〈芸〉と〈色〉の混在が見られる。この場合、〈芸〉と〈色〉の多様性、流動性を物語るものとして、本来であれば、芸妓として〈芸〉を売る存在であるにもかかわらず、金銭のために客の誰とでも肉体関係を持つ者を揶揄した「不見転」の例、「芸妓」と「娼妓」の鑑札を両方持ち、宵の口は芸妓として宴席に侍るが、客からの要望があれば「娼妓」ともなる「二枚芸者」、「有芸娼妓」の例などがあげられる。

これらの例からも、かつての芸妓と娼妓の境界は、今日のように明確に分けられたものではなく、流動性のあるものであったことが伺えるが、その一方で、芸妓の間には、「芸妓」と「娼妓」を明確に異なるものとする意識が存在することもまた事実であった。

本稿では、2013年に実施したフィールド調査をもとに、長野県諏訪湖沿岸地域である上諏訪、下諏訪、岡谷、茅野の4地域の花柳界の実態を明らかにするとともに、当該地域で行なわれてきた〈芸〉と〈色〉の境界線の変遷をめぐり、そのあり方を検討する。

2. 諏訪湖沿岸の花柳界

諏訪湖沿岸地域には、近代以前より中山道沿いの宿場町が点在しており、なかでも上諏訪と下諏訪は古くから温泉街として名が知られていた。明治維新後は、岡谷を中心に展開した「片倉組」、「山十組」、「小口組」などに代表される製糸工業、茅野を中心に展開した寒天製造業、昭和に入ってから、機械金属工業が発展し、1950年代以降は「三協精機製作所」、「東洋バルヴ」、「オリ

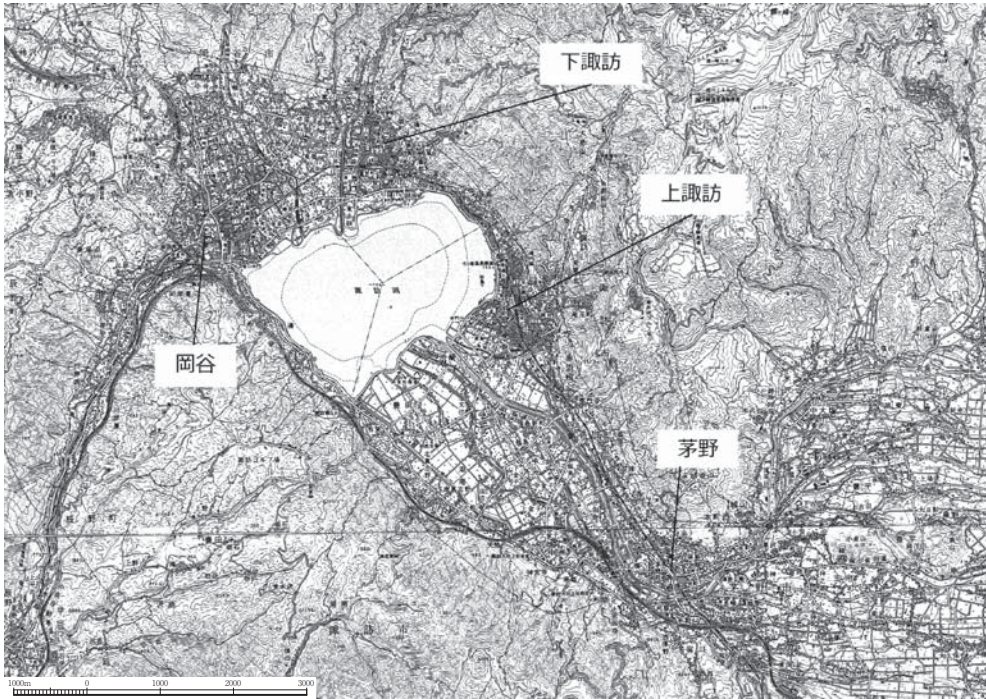


図1 諏訪湖沿岸地域
国土地理院 1:500,000 地形図「諏訪」、「高遠」をもとに作成。

バス光学工業」などに代表される精密機械工業によって支えられてきた地域である。

諏訪湖沿岸の各地域は、東京から塩尻を經由し名古屋までを繋ぐ中央線の開通により、都市との繋がりが確立されると、産業、経済、文化などあらゆる面で飛躍的に発展した。

以上の状況を背景に、諏訪湖沿岸部では主に上諏訪、下諏訪、岡谷、茅野の4地域において花柳界が展開されるに至った(図1参照)。

上諏訪、下諏訪、岡谷、茅野の花柳界では、それぞれ独自のしくみが機能していた。それぞれの地域の見番¹⁾、主な芸妓の派遣先(料理屋、料亭、ホテル、旅館など)は次のとおりである。

上諏訪では、上諏訪駅周辺の手前から湖岸通りを中心に活動を行なう「大手見番」、「湖柳見番」が存在した。主な芸妓の派遣先として、「信濃」、「宗藤本」、「港新」、「市川」、「水月」などの料亭があった。

また、花柳界が展開する街からやや外れた衣之渡川のほとりには、「衣之渡遊廓」も存在していた。この地域については、後に詳しく記述する。

下諏訪では、特に呼称は設けられていなかったものの、街道沿いの御田町、湯田町の料理屋に芸妓を派遣する見番が存在し、活動が行なわれていた。主な芸妓の派遣先は、「ぎん月」、「かめや」、「うらかめや」、「喜楽」、「鉄鉦泉」などの旅館であった。

この御田町、湯田町に隣接する塚田町には、「下諏訪遊廓(または塚田町遊廓)」と呼ばれる芸娼

1) 諏訪湖沿岸地域の花柳界では、芸妓の派遣等を仲介する事務所の名称は、「検番」ではなく、「見番」と表記されている。

妓を抱える遊廓も存在した。

岡谷には、本町の料理店、料亭に芸妓を派遣する「小柳見番」がかつて存在していた。主な芸妓の派遣先は、「小柳」、「寿々菟亭」、「信濃屋」、「みゆき」、「千成」、「鳥かつ」、「山せん」、「松風亭」などの料理屋・料亭であった。

茅野では、旧・宮川村地域（現在の宮川町）に置かれた「宮川見番」と旧・永明村地域（現在の仲町）に置かれた「永明見番」が存在した。主な芸妓の派遣先として、永明地域には、「世界」、「新来」、「真砂」、「富士香」などの料理屋・料亭があり、上川橋向こうの宮川地域には、「角屋」、「銀水」、「二葉料理店」、「苦楽園」、「金泉料理店」などの料理屋・料亭がそれぞれ存在した。

これらの4地域の花柳界では、元々他地域に所属する芸妓の出張は禁じられており、花柳界間での交流はほとんど行なわれない独立した関係にあった。また、各花柳界の客層、地域性、酒宴に興を添えるという役割においても、各地域で独自性がみられる。

たとえば、岡谷の花柳界は、地元の旦那衆たちによって、他地域から訪れる客を接待する場として用いられており、旦那衆たち自身は、隣の下諏訪の花柳界、もしくは諏訪湖を舟で渡り、上諏訪の花柳界で遊興することが多かったとされる。

また、上諏訪は、高島藩の城下町であり、旧・諏訪郡の時代は、郡役所が置かれていたため、「政財界の奥座敷」として、上諏訪の花柳界が用いられていた。上諏訪の花柳界は、企業情報の交換や社交、取引の場でもあったが、当時の企業家たちが趣味の小唄、長唄を披露しつつ、〈芸〉を觀賞し、楽しむ場でもあった²⁾。

諏訪湖沿岸部の4地域のなかでも茅野は寒天製造業がもっとも盛んな地域であり、茅野の花柳界が最も賑わう時期と寒天の製造時期とが結びついていた。これらのことから、地元では茅野の芸妓のことを「寒天芸者」と表現する者もあったという（小川 2007）。

その後、1969、1970（昭和44、45）年頃、時代の情勢から花柳界全体が徐々に衰退し始めた頃、花柳界間の関係性は緩やかに変動するようになった。岡谷、下諏訪、茅野の花柳界は、地域を抱える芸妓の数と芸妓を求める客の需要とが釣り合わなくなり、客の要望に應えるため、上諏訪の芸妓が出張でお座敷に呼ばれることを認めるようになった。このように花柳界同士の関係は、需給関係の変化に対応して柔軟に再編されている。

しかし、それより以前に花柳界のあり方を大きく変動させる再編、つまり花柳界内部における〈芸〉と〈色〉の境界線をめぐる再編が行なわれていた。この再編について、上諏訪の花柳界を事例にみていく。

2) 小川氏の自伝によれば、「終戦後（1947、1948（昭和22、23）年頃）、小唄の教室が始まった。師匠は大和工業（今のエプソン）創業者、山崎社長（ヤマザキヤ先代）が東京からお連れした小唄の稲本くわ喜美先生だった。そのときの門下生は、富士銀行諏訪支店長、先代河西豊店河西氏、先代麗人酒造小松社長、当時の諏訪税務署高山夫妻、本田精工本田社長夫人、エグロ江黒甚平夫妻、サンエスケート進士社長、先代舞姫酒造土橋社長、諏訪精工舎北條氏、三協精機中村文明氏、大手芸妓衆で数知れない多くの人々と交じた」（小川 2007: 133-134）とあり、諏訪湖沿岸部の産業を支えた企業家たちの多くが花柳界と深い関わりを持っていたことがわかる。

3. 花柳界のなかの〈芸〉と〈色〉

冒頭に述べたように、日本各地の花柳界には、〈芸〉を売る「芸妓」と〈色〉を売る「娼妓」という異なる役割を持つ女性があり、この両者の境界は多様かつ流動的であったが、現実にはどのような実態であったのだろうか。

これを探るべく、〈芸〉と〈色〉の境界線をめぐる決定的な再編である売春防止法施行前後の花柳界内部の〈芸〉と〈色〉をみていきたい。

3.1. 花柳界の〈芸〉

3.1.1. 花街・大手

上諏訪の花柳界は、諏訪市大手町を中心に展開してきた。大手町は、明治36年、暖（縄手）町として発足し、1909（明治42）年に大手町と改称される。大正元年「都座」（現在の長野県信用組合諏訪支店の場所）が完成し、1917（大正6）年には、上諏訪の代表的な料亭の一つである「信濃」が創業した。同じく一流料亭の「宗藤本」は、1919（大正8年）、1890年代創業の「藤本」と1916（大正5）年に本町で開業した分店「新藤」の両店を合併して、大手町（現在の城東病院の場所）に開業した（「大手町誌」編集委員会 1997）。

1920（大正9）年、大手町1、2丁目が置屋地区に指定され、近隣の和泉町の置屋・料理屋が大



図2 大正末期の大手町地図
『大手町誌』（「大手町誌」編集委員会、1997年発行、巻末地図）より。

手町に移転し、昭和初年には浜町の置屋も移り、上諏訪の花柳界が形成され始めたのである（図2参照）。

大正末期から昭和初期にかけての製糸産業による好景気から、大手町は、岡谷の製糸家、諏訪の商店街の旦那衆、近隣の農村から親の目を盗んで遊興に来た若者たちで、賑わっていた。また、1932（昭和7）年からは、霧ヶ峰スキー場の開発が行なわれ、地域の客のほか、諏訪湖遊覧、温泉、スキー等を目的に大勢の観光客が諏訪湖沿岸部に訪れた。

3.1.2. 花柳界のしくみ

上諏訪における花柳界の主要な構成要素は、料理屋・料亭・旅館・ホテルなどの芸妓の派遣先、見番、置屋である。

それぞれの役割でいえば、「料理屋・料亭・旅館・ホテル」は、客の所望に応じて芸妓を呼び、遊興の場を提供する。「見番」は、芸妓の取次ぎや玉代の精算などをする所で、地域によっては芸事の練習場所も兼ねている。そして、「置屋」は、芸妓を抱える場であり、芸妓見習いから一本の芸妓になるまでの養成と、料理屋・料亭からの注文に応じて芸妓を派遣する役割がある。

たとえば、上諏訪で、客が芸妓を所望した場合、客から依頼を受けた料理屋・料亭は見番に連絡し、見番は客の所望に応じて各置屋に連絡する。

上諏訪には、戦前は大手町に「大手見番」、浜町に「湖畔見番」があり³⁾、戦後から平成初期頃まで、「大手見番」と湖岸通りに「湖柳見番」という2つの見番が存在したため、組合に所属している料理店・料亭には名簿が配られていた（写真1参照）。名簿には、置屋名、芸妓の名前、連絡先がそれぞれ記載してあり、これに応じて店側は芸妓の取次ぎを依頼した。

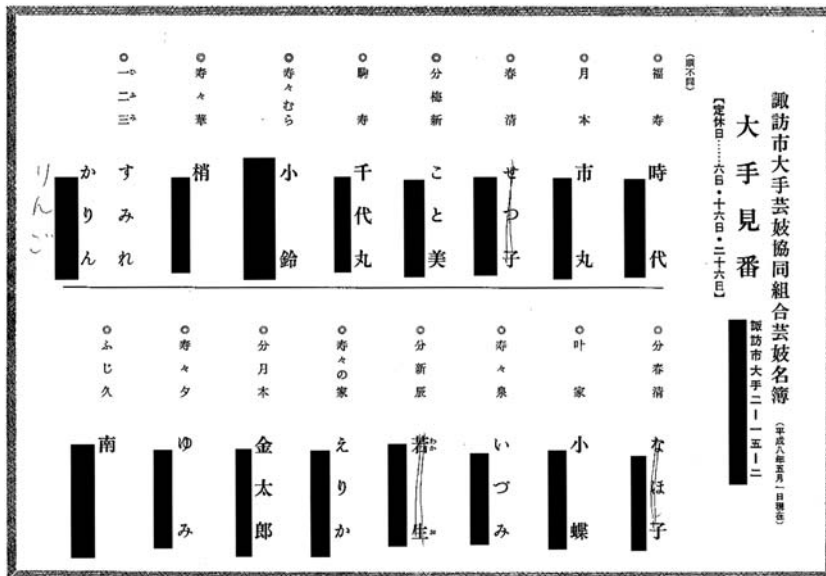


写真1 諏訪市大手芸妓協同組合名簿（1966年5月1日版）
「崋久のや」鈴木幸子氏所蔵。

3) 大正末期から昭和初期にかけて、大手見番は料亭「宗藤本」の向かいにあり、現在の大手見番とは場所が異なっている。

依頼された見番は、見番に所属する芸妓の名札と当日の予約状況を表す箱を見て、当日のアキ・フサガリ、そしてどの芸妓が休みかを確認する。そして、芸妓の予約を受け付け、それぞれの置屋に連絡したのである。

芸妓たちは、通常 15 時頃まで、鳴物や長唄、常磐津小唄、踊りなどそれぞれの稽古に励み、それから美容院で髪を結い、化粧や着替えなどの支度をすませる。

1935（昭和 10）年頃は、芸妓たちは地毛で年に合った日本髪を結っていた。半玉は「桃割れ」か「おしどり」を結い、25 歳までは「結い締」、「高島田」を小ぶりに結ったもの、30 歳以上は「芸こ結い」「つぶし」「銀夜返」「夜会まき」などを結った（「かみすわ温泉 花柳界今昔」7、『南信日日新聞』1986 年 2 月 3 日）。

1955（昭和 30）年頃から、上諏訪にも美容院が誕生し、パーマメントが導入され、通常のお座敷ではかつらの使用や、普通の結髪（アップかショートヘア）が主流となり、日ごろから日本髪を結う芸妓は少なくなった。日本髪を結わなくてはならない日は、年始年末、踊りの舞台に上がる日、特に大切なお座敷がある日、行事に参加する日などであった。

早い日は 15 時～16 時頃からお座敷に呼ばれることがあったため、それまで当日にこれらの支度を済ませなくてはならない。支度が済み、置屋を出るときになると、置屋の主人が、芸妓の肩のあたりで火打ち石をきり、送り出す。そして、宴会が始まるとその時々ふさわしい演目が選ばれ、唄、三味線、踊りが披露される。この演目を「お座付け」という。正月のお座付けならば、「松竹梅」、婚礼の披露宴や客の誕生祝いの席ならば、「鶴亀」が披露された。

このほかに、諏訪沿岸部の花柳界独特の〈芸〉というものもある。それが「お諏訪節」、「スケート節」、「霧ヶ峰小唄」、「御柱小唄」、「諏訪音頭」、「岡谷小唄」などである。諏訪音頭では、四季を通しての諏訪の美しさを唄い、スケート節や霧ヶ峰小唄では、諏訪湖でのスケート、霧ヶ峰でのスキーの様子を唄っている。また、製糸産業で栄えた地域であることから、岡谷の街の繭と良い糸を賛美する唄の岡谷小唄などもよく歌われていた。

芸事に優れ、愛嬌溢れる売れっ子の芸妓ともなれば、一日のうちお座敷も多く、方々からお呼びがかかる。客のなかには、「遅れてもいいから来てほしい」という客もあり、芸妓が忙しく時間が取れないと「ちょっと顔を見せるだけでもかまわない」という客までいる。このような場合、前者を「おもらい」、後者を「ぜひぜひもらい」と呼び、「ぜひぜひもらい」の場合、15 分しかお座敷に顔を出さなくとも玉代は 1 席分ついた。

このほかに、客が芸妓に対し祝儀として、お座敷に顔を出さずとも玉をつける「カラ玉」というものもあった。

毎月の 10 日、20 日、30 日になると、お座敷



写真 2 上諏訪花柳界で用いられた玉券と御約束券
「かみすわ温泉 花柳界今昔」8、『南信日日新聞』
1986 年 2 月 4 日より。

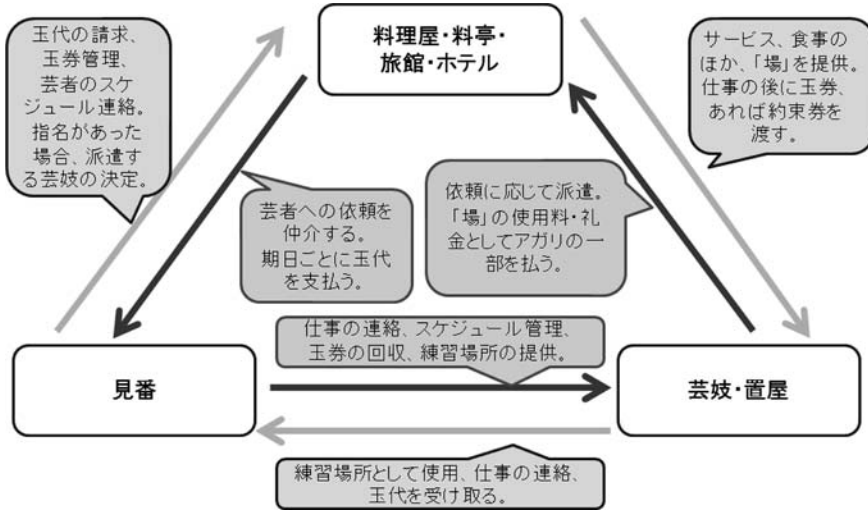


図3 上諏訪花柳界におけるしくみ

で芸妓が稼いだ玉代は、すべて料理屋・料亭・旅館・ホテルを、見番の事務員が回収して回り、計算が行なわれた後、見番から置屋に送られてくる。

芸妓は、この期間幾ら稼いだかわかるように、お座敷があがったあと、店から玉券が渡される(写真2参照)。置屋に戻ると置屋の主人に玉券を手渡し、置屋の主人は玉券からその芸妓の収入を計算し、集金日に見番の人間が出した計算と照らし合わせて、芸妓のアガリを支払い、玉券を回収した。このようにして花柳界の基本的なシステムは成り立っていた。図で説明すると上記のとおりとなる(図3参照)。

3.1.3. 芸妓になるまで

当時の上諏訪の花柳界では、仕込みっ子から一本の芸妓になるまでおおよそこのような制度となっていた。

上諏訪花柳界には、戦前芸妓と置屋の間に周旋屋が3軒ほどおり、周旋屋は、親族のものから売られた女性、よその地域から流れてきた芸妓を連れてきた。

大手町で1930~1944(昭和5~19)年まで「万千代」としてお座敷に出ていた元・芸妓によれば、昭和初期は北九州や北海道、北陸のあたりから貧農の娘が15円くらいで売られてきており、貧農ばかりではなく旅芸人の娘もいたとのことだ(「かみすわ温泉 花柳界今昔」4、『南信日日新聞』1986年1月28日)。郷里からできるだけ離れた遠地に売られることもあったが、近隣から売られてくる子どももいた。

顔見せで話がつくと、背負ってきた借金を置屋が肩代わりし、その場で芸妓の年季が決まる。芸妓の年季は大体10年が相場で、その年季が明けると1年だけ礼奉公をすることとなっていた。

売られてきた仕込みっ子は、置屋の雑用をしながら、見番の芸妓学校で花柳流の踊りや三味線などの芸を習い、15歳前後で半玉となってお座敷へあがった。半玉になって初めてお座敷へあがり、舞を披露したり、客にお酌をしたりするが、一本の芸妓とは異なり、「泊り」は行なわない。

一本になるときは、踊りと三味線のお師匠さん、置屋の主人、先輩芸妓、芸妓組合長、そして警

察と見番の人間の立会いのもとで、試験が行なわれた。立会人が居並ぶ前で、踊りか三味線のうち、一番得意な芸を披露する。この試験を突破することで、晴れてお披露目の運びとなる。

お披露目の支度には30円ほどかかったという。着物から足袋、腰のものにいたるまで置屋が全てそろえるものの、「お披露目」に掛かった費用は売られた代金も含めて、そっくり芸妓の前借(借金)となる。仕込みっ子から一本になるまでの前借は、平均150~200円であった。この間に親が金を借りに来ると、それがまた前借となる。

お披露目の際は、置屋が用意した、置屋の名前と芸妓の名前入りのナイロンタオルを持参し、見番の人間と置屋の主人が付いて、料理屋・料亭、旅館に挨拶してまわった。

ちなみに、芸妓の名前の決め方は各置屋によって多様である。今回、上諏訪の芸妓3名に名前の決め方について尋ねたところ、置屋の主人がいくつかの名を紙に書き、それを引いて決めるというやり方、祈祷師に決めてもらうなどそれぞれ異なっていた。

一本のお披露目をしてから二年ほどは「丸がかえ」で、稼ぎの玉代とご祝儀も全部置屋に入り、衣装、食事に掛かる諸費用は置屋持ちとなる。その後、二年くらい後は「ご祝儀取り」となり、玉代は置屋に入るが、ご祝儀券やチップは自分のものとなる。お座敷着に掛かる費用は置屋持ちとなるが、普段着、身の回りの小物は自分で賄うようになる。さらにその上が「分け」であり、四分六で稼ぎの40%が自分の手に入り、60%が置屋のものとなる。そのうえ、祝儀も自分のものとなるから借金返済の大きな力になる。

これらの段階を経て、年季が明けると自由の身となるが、大抵のちは「看板借り」となる。「看板借り」は、玉代が自分のものになり、食費と「看板料」を置屋に払う。しかし、大抵の芸妓は一本になってまもなく旦那がつく。なかには、身請けされて二号さんとなり、芸妓を引退する者もいた。

このため、1935(昭和10)年頃には、20代以上の芸妓はほとんどおらず、20歳前後で「年増」、25歳くらいで「中年増」、それ以上は「大年増」と呼ばれていた。

3.2. 花柳界の〈色〉

華やかな〈芸〉の花柳界と並行して、〈色〉の花柳界そして〈色〉そのものである遊廓が存在していた。これら〈芸〉と〈色〉の境界線を左右させるものとして「前借」があげられる。

3.2.1. 「泊まり」「不見転」「枕芸者」

芸妓たちは、前述の「看板借り」となるために芸の修練に努めるものの、なかには金銭的理由から旦那以外の不特定多数の客と「泊まり」を行なう者、つまり「不見転」「枕芸者」と呼ばれる芸妓もいた。

通常、宴会は二時間くらいでおひらきとなる。この後、帰る客と二次会の行く客に分かれる。宴会が終了すると、おのおのが個室に分かれて泊まる。決まった芸妓が旦那と寝て、人数が足りないところを「不見転」が補っていた。

戦前、自らが上諏訪の芸妓であった増田小夜は、「不見転」について次のように述べている。

その年も暮れにせまったころ、またひとり一本姐さんが移って来ました。…

千生という名でお披露目をしましたが、その晩から、毎晩のように泊り歩いて、家にはほとんど寝ませんでした。

誰とでも寝る人を不見転と言いましたが、当時の芸者は、一流と言われる人はやたらと泊らぬものでした。たいていの芸者は一本になるとすぐ旦那が決り、旦那がいいと一人だけ、金ばなれが悪くてやって行けなければ二三人の旦那をもち、それ以外の人とは泊りません。そういうことは、すべて置屋の母さんと見番のあいだでひそかに話通じていて、「誰誰さんは旦那が決ったから泊りません」というふうに旅館や料理屋へ通じるようになっていました。

(増田 1957: 63)

客と「泊まり」を行なった場合、玉代は通常よりも割り増しとなる。この料金の違いについては次のように説明されている。

お客の大勢いるなかで、「このひと、玉二本でいいんだって。どなたかお望みの方は、別室にどうぞ。」などと皮肉が始まりました。ふつう旦那と泊る場合は時間だけの玉、旦那以外の人と泊る場合は時間の倍の玉をつけてもらい、泊らないで寝るだけのときは玉十本というのが常識になっていましたから、「玉二本」とはたいへんな侮辱です。(増田 1957: 74-75)

「不見転」「枕芸者」は、〈芸〉と〈色〉の境界線を変動させる存在であった。そして、そこにみられる揺らぎこそが芸妓の魅力の一つなのだとする説明も行なわれている。

芸妓にはお金に揺られる身の哀れさがある。それがその妓の美しさでもあり魅力でもあった。そんなところにお客さんもほれた。…なかには見ず転芸者・枕芸者といわれる人だっていた。見ず転で終わる人もいれば芸を磨いて上へのぼってくる芸者もいた。旅の人は見ず転を求める人も多かった。製糸が盛んなころは横浜の製糸仕入れ商人がたくさんきた。外人もきた。外人とはあとあと評判が悪くなるから敬遠する傾向が強かったようだ。なんといっても芸を磨いて身持ちの堅い芸者が一流どころ。芸者には芸者のプライドがある。「私はだれとでもっていうわけじゃない。お金だけではどうにもならない」という芸者の心意気がある。一流の客には見ず転をひいきしない気風もあった。そこらへんが上諏訪花柳界を支えてきた。

(「かみすわ温泉 花柳界今昔」5、『南信日日新聞』1986年1月30日)

これまでの例は、芸妓でありながら個人の意思で〈色〉に偏る者の例であった。このほかにも上諏訪の花柳界の内部には、花柳界に混在する〈色〉が存在していた。それが「大手遊廓」である。

3.2.2. 「大手遊廓」

大手町のなかには、地域の住民から「大手遊廓」と呼ばれていた、「タチの悪い置屋群」というものも存在していた。「大手遊廓」は、後述する衣之渡遊廓のように、正式な認可を受けて娼妓を置いた遊廓ではない。

かつて「大手遊廓」と称される置屋群の一つに所属していた芸妓は、当時を振り返りこのように

語る。

「今日、あなた鏡を使ったでしょ。使用料として〇円借金につけてくわね」といった感じで、その置屋では、あれこれと理由をつけて借金を増やしていく。所属している芸妓たちは、置屋の主人からよく「泊まり」を強いられていました。(大手芸妓 A 氏による語り)

前項でとりあげた語りからもわかるように、芸妓としての矜持を持つ者はむやみやたらに客と「泊まり」を行なわないものであったが、「泊まり」を行なえば、通常の玉代よりも簡単に大金を入手することができた。

「大手遊廓」の置屋に所属する芸妓たちは、自身の抱える借金、そして置屋で付けられた新たな借金を返すべく、望む望まざるを問わず「泊まり」を強いられていたのである。

このように、上諏訪の大手は〈芸〉を売る地域、衣之渡遊廓付近は〈色〉を売る地域という住み分けが行なわれていたが、〈芸〉を売る花街のなかにも「大手遊廓」のように所属する芸妓たちに、ほとんど娼妓まがいの客の取らせ方を強いる置屋というものも確かに存在していた。

この大手遊廓の付近には、「サボシ屋」と呼ばれる店もあった。サボシとは、上諏訪、下諏訪に存在した、売春婦の呼称である。住民の語りによれば、サボシは娼妓とは異なり、親方を持たない売春婦とされる。その営業形態は、多種多様で、「サボシ屋」を開業し、建物の二階で客を待つ者もいれば、「立ちんぼ」のように街頭に立ち、自ら客引きを行なう者もいた。値段は、当時風呂代が 10 円であったのに対し、サボシ屋は飲食抜きで 800～1000 円ほどかかった。

これらのことから、「大手遊廓」一体は、花街のなかに混在した〈色〉の地域といえるだろう。

3.2.3. 「衣之渡遊廓」

衣之渡遊廓は、かつて上諏訪町字衣之渡に存在した遊廓である。上諏訪駅から遊廓まで、直通の大通りが貫通していたほか、諏訪湖に繋がる衣之渡川の流域に存在していたため、交通の便が良い場所にあったといえる。

この遊廓は 1880 (明治 13) 年に置かれ、1935 (昭和 10) 年頃は娼館が 8 軒あり、娼妓は 30 人ほどいた。それぞれ妓楼名は、牡丹楼、高島楼、鳳来楼、新鳳来楼、日笠出楼、長登楼、新泉楼、旭楼であった。

店の仕組みは、写真制度と陰店制度が採られており、料金は、店によって違いは存在するが、簡単なつまみと銚子が一本付いて、点灯から翌朝まで 4 円 50 銭以下 2 円止まりであった。

この他に「一時間遊び」というものもあり、この場合に限り「廻し」は取らなかった。この料金は全部で 1 円 50 銭であるが、その代わり料理や酒は付かない。所属する娼妓は一枚鑑札であり、地元出身の娼妓が多いためか、岡谷小唄、スケート節、伊那節、木曾節等を一節程度披露することもあった。遊廓は、花街の大手町が近かったこともあり、町から芸妓や半玉を呼ぶこともあった。この場合、料金は芸妓一時間につき玉代 1 円、半玉は一時間につき 70 銭 (南編 1993 : 87)。

当時を知る住民の語りによれば、「遊廓の周囲には黒塗り柵があり、並木通りから蓮池の脇 (現・諏訪市消防署辺り) を通っていくと、正面の入り口には御柱のような日本の柱でできた大門があった。その中には茶屋と射的上があって、遊廓が並んでおり、とにかくにぎやかであった」とのこ

とである（宮坂1978:155）。

娼妓のなかには芸妓として幼少時に親によって身売りされたものの、その後も親が金の無心に訪れ、借金がかさみ、娼妓として転向せざるをえなかったもの、置屋の主人によって娼妓に転向させられた芸妓も存在していた。

増田小夜の『芸者』のなかには、置屋「竹の家」に所属していた先輩芸妓に、月一度情緒不安定になり、お座敷がかかってもうじじとする静花という芸妓が登場する。これに嫌気がさした置屋の主人（かあさん）が静花にこのように話す場面がある。

「気にいらなければ、いつでも住み替えさせてやるよ。お前は芸者のがらじゃあないね。芸者はね、少しくらい様子がよくてもいい気になっては売れないんだよ。お前は女郎が柄に合うからあすにでもそうしな。」

「母さん、かんべんして下さい。一生懸命稼ぎますから。」

…住み替えが主人の心一つできめられ、当人の意志などみとめられる時代ではなかったのです。警察が立会いで人間の売買が公然とおこなわれていたのです。（増田1957:38-39）

昭和32年の売春防止法施行以前、法的には〈芸〉の花柳界、〈色〉の遊廓という線引きが存在していた。

しかし、実際の花柳界内部には、金銭的理由から娼妓のように客の誰とでも性的関係を持つ「不見転芸者」、芸妓から娼妓への転向、「大手遊廓」のように所属する芸妓に「泊まり」を強要する店など、〈芸〉の花柳界のなかにも〈色〉は混在しており、また、〈色〉の遊廓においても、芸者が遊廓に出張し芸の披露をすることもあったことから、現実の花柳界と遊廓では、〈芸〉と〈色〉は混在しており、花柳界と遊廓は「地続き」となっていたことがわかる。

3.3. 昭和32年以後の花柳界

1956（昭和31）年、売春防止法が制定され、翌1957（昭和32）年、罰則規定を含めない施行がなされた。そして、1958（昭和33）年4月1日より罰則規定を含めて、完全に施行された⁴⁾。

これにより、地域の売春を目的とする遊廓を含める特殊飲食店が廃止となり、上諏訪の花柳界に隣接していた衣之渡遊廓は閉業し、花柳界を取り巻く〈色〉は姿を消したかのように思われた⁵⁾。

また、この法律の施行は少なからず、花柳界にも変化をもたらしている。施行以前、150人程いた大手の芸妓は、法律施行をきっかけに故郷に戻った者もいれば、別の職業に就いた者もいたため、80人程に減少した。ただし、なかには、元々娼妓であったものの、仮初の〈芸〉を身につけ、「芸妓」を名乗ることで、〈芸〉のなかに潜り込んだ〈色〉も存在した。

その後、花柳界は、終戦後復活した寿々本系の「大手見番」、そして新たに設立した湖柳系の「湖柳見番」が取り仕切るようになった。

4) 地域の住民からは、1957（昭和32）年の罰則規定を含めない施行の年が「売春防止法施行」の年として認識されている。

5) なお、現在、衣之渡遊廓の跡地は「衣之渡モータプール」という駐車場になっている。

大手見番は、1946、1947（昭和 21、22）年頃、置屋「寿々本」主人の岩波政三氏によって復活した。復活当初は約 20 名の芸妓が抱えられ、その後、ピーク時の昭和 30～40 年代には約 60 人（上諏訪全体では百数名）の芸妓が抱えられていた。踊りの師匠は、岩波氏の養女である花柳徳輔氏と花柳雄啓氏が勤めた。

一方、大手見番の復活と同じ 1847（昭和 22）年頃、大手見番所属の置屋「葛牡丹」から分かれ、芳山聖九氏が浜町で置屋「新牡丹」を開業する。1953（昭和 28）年頃、芳山氏は、大手消防署近くに電話連絡所を設け、しばらくして、片羽町に湖柳見番の前身である「片羽見番」を新たに創設した。設立当初、片羽見番所属の置屋は 3～4 軒で、芸妓は 14～15 名ほど所属していた。

その後、1956（昭和 31）年、湖岸通りへと場所を移し、「片羽見番」は「湖柳見番」となり、組合名も諏訪市温泉芸寮組合と改めた。この当時は、所属する置屋は約 20 軒、芸妓は約 30 名が抱えられ、ピーク時には 50 名もの芸妓が所属していた。

ところで、この 2 つの見番、すなわち「大手見番」と「湖柳見番」は、「〈芸〉の見番」「〈色〉の見番」と対比して語られることが多かった。この場合、大手を指して〈芸〉の見番と呼び、湖柳を指して〈色〉の見番と呼んでいる（写真 3、4 参照）。これは、湖柳に所属する芸妓たちが、娼妓まがいのことをしていた、という意味ではない。この当時、大手所属の芸妓たちは、芸を重んじる分、平均年齢 40 代と年配の芸妓が多かったのに対し、湖柳所属の芸妓たちは、なかには芸を重んじる芸妓もいたが、平均年齢 20 代前半の比較的若い芸妓が多かった。住民の語りによれば、そのような芸妓は「芸妓というよりも酌婦に近い存在」だったとのことである。このことから、芸を重んじる〈芸〉の見番、かたや、芸よりも若さを重んじる〈色〉の見番という構造が生まれたと推測される。



写真 3 大手見番

「かみすわ温泉 花柳界今昔」13、『南信日日新聞』1986年2月9日より。



写真 4 湖柳見番

「かみすわ温泉 花柳界今昔」13、『南信日日新聞』1986年2月9日より。

以上をまとめると次のようになる。すなわち、1957（昭和32）年以降、遊廓という〈色〉は姿を消した。しかし、花柳界の〈芸〉の中に潜り込むことで〈色〉が継続する現象や、〈色〉としての「若さ」を重視する見番が出現するという現象も見られた。このようなかたちで、売春防止法施行以後も、花柳界を取り巻く〈芸〉と〈色〉という二元的構造は保たれていたといえる。

しかし、昭和40年代に入ると、宴席の場で、「コンパニオン」の活動が目立つようになった。このコンパニオンという新たな〈色〉は、花柳界内部の〈芸〉と〈色〉の均衡を崩すほど、勢力を拡大させていった。

3.4. 新たな〈色〉と花柳界の衰退

昭和40年代に入ると、芸妓志望の者が減り、代わりに芸妓を辞めるものが増えていった。諏訪市観光協会長の松沢一夫氏は、当時の花柳界の衰退状況について次のように語っている。

若い芸者は師匠から厳しく芸を仕込まれるより、スナックやバーに勤めた方が実入りがいい。芸者をやめてスナックへ移った人が多かった。バーがスナックに押され、芸者はスナックに食われた。

（「かみすわ温泉 花柳界今昔」14、『南信日日新聞』1986年2月10日）

この芸妓の減少も花柳界にとって痛手であったが、昭和50年代前半からのカラオケやゴルフなどの趣向の多様化も花柳界に打撃を与えた。

料亭・料理屋のなかには、客の要望により、カラオケを設置する店が徐々に増え、宴会の座興には芸者衆によるお座付けのほか、カラオケという余興が新たに追加されるようになった。しかし、カラオケは、全員で楽しむ余興というよりも、マイクを持って歌っている個人のみが楽しむ余興であり、また芸者衆が培ってきた三味線、踊りなどの芸を必要としないなど、花柳界の宴会のあり方にはそぐわないものだった。

ある料理店関係者は、カラオケについて次のように語る。

昔、お客さんからの要望があつて、うちの店にもカラオケを設置していた。芸妓の三味線の音色や声と違い、カラオケは歌っている本人しか楽しめないし、なによりマイクを通して誇張された歌声というものは、聞いている人にとってあまり気持ちのいいものではない。しばらくして、お客さんからも似たような意見があがり、結局うちでは撤去することにした。

（料理店関係者 B 氏）

また、このカラオケブームと同時期に、企業の接待のやり方に変化が起こった。これまで花柳界を利用していった企業が、宴会接待からゴルフ接待へと趣向を変え始めたのである。

ただし、宴会接待がまったく無くなったというわけではない。なかには、宴会接待を継続する企業もあったが、新たに「コンパニオン」という酒宴に興を添える存在が台頭し始めたのである。芸者衆と違って、芸を持たず、立ち居振る舞いがしっかりしていないなどの欠点もあったが、芸者衆

に比べれば、比較的若い女性ばかりが派遣され、料金も安い。また、座が盛り上がり、普段より飲み物の注文が多く入るなど、店側のメリットも大きく、コンパニオンを歓迎する店も増えるようになった。

もちろん、花柳界側も事態を看過するほど楽観的ではない。1974（昭和49）年、酌婦協会を経て、「諏訪女子宴会サービスクラブ」が発足する。この団体は、諏訪市の料理屋・料亭、見番、置屋から構成される「諏訪市三業組合」に加入しており、花柳界側が提供するコンパニオン⁶⁾に近い存在といえるだろう。

「諏訪女子宴会サービスクラブ」に所属する女性たちは、芸を持たないが、宴席に芸妓たちとともに侍り、大手、湖柳見番の芸妓たちの補佐役を勤める。「諏訪女子宴会サービスクラブ」の女性たちには、「宴席では、芸妓たちに対し出しゃばらず、宴席での酒や灰皿の状態に常に目を配らせておく」「酒は嗜むものの、膳に箸をつけてはいけない」「服装は、芸者衆より目立たないウールか化繊の適度に見栄えの良い和服を着用する」などの約束事があった。

玉代は、一本（60分）3,500円で一座敷最低二本とされていた。この当時の芸者衆の一座敷（90分）の玉代は7,500円なので、芸者衆を呼ぶよりかは安かった。このほかに予約料として300円かかる。

かつて三業連合会の協定には、連合会会員が連合会以外の料理店、料亭、置屋を利用した場合、厳重な処罰を与えるという規則が存在していた。このサービスクラブ発足時も、両見番とサービスクラブ以外のグループを挙げた場合、その料理店・料亭を箱止め⁷⁾にする規則が存在した。しかし、少しずつ客側からコンパニオンを要望する声が高まり、この規則は数年後有名無実となった。

徐々に勢力を伸ばすコンパニオンという〈色〉に対抗し、〈芸〉の花柳界は、コンパニオンと自

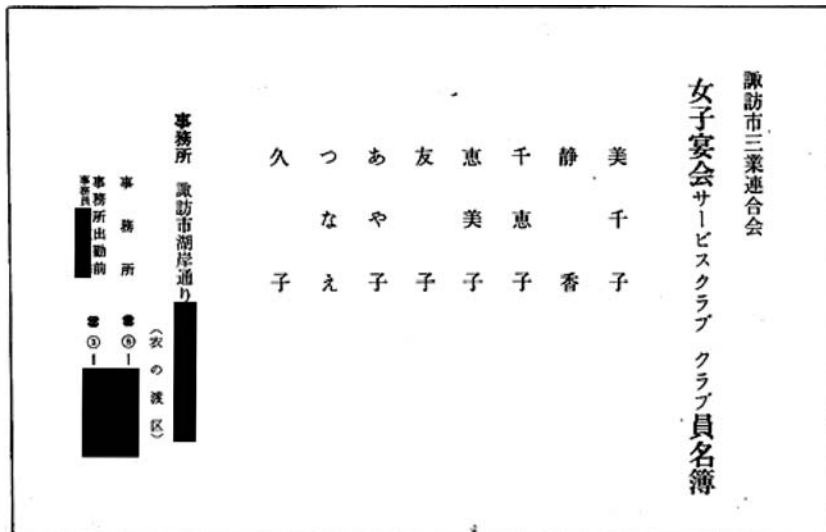


写真5 料理屋・料亭に配られた諏訪女子宴会サービスクラブの名簿（発行年不明）
「崑久のや」鈴木幸子氏所蔵。

6) 実際は「^{やと}雇女」と呼ばれる臨時雇用の仲居、「酌婦」である。

7) 芸者衆とクラブ員の出入り禁止を意味する。

らとの中間に「サービスクラブ」という存在を置いたが、花柳界を離れた客足は戻ることなく、衰退の一途をたどっていった。

結 語

以上、本稿は、これまで花柳界研究において、ほとんど取り上げられなかった地方花柳界を取り上げ、地方花柳界の実態とそのしくみ、とりわけ花柳界をめぐる〈芸〉と〈色〉の境界について分析したものである。本研究では、次の点が明らかになった。

諏訪湖沿岸地域は、維新後の岡谷を中心に展開した製糸工業、茅野を中心に展開した寒天製造業、そして昭和に入ってから、1950年代以降、精密機械工業などの近代産業の展開によって、産業、経済、文化などが発展し、上諏訪、下諏訪、岡谷、茅野の4地域でそれぞれ花柳界が展開されるに至った。

それぞれの花柳界には、客層、地域性、酒宴に興を添えるといった役割においても独自性がみられる。たとえば、岡谷の花柳界が、製糸工業の旦那衆からは「接待の場」として用いられていたのに対し、上諏訪や下諏訪の花柳界は、「自身が遊興する場」もしくは、「企業情報の交換や取引の場」として用いられていた。

また、茅野は、寒天製造業がもっとも盛んな地域であり、茅野の花柳界が最も賑わう時期と寒天製造時期が結びついていたことから、地元では茅野の芸妓を「寒天芸者」と表現する者もあった。

諏訪湖沿岸地域のそれぞれの花柳界は、元々花柳界間での交流がほとんど行なわれておらず、独立した関係にあった。しかし、1970年代頃、時代の情勢から花柳界全体が衰退し始めると、需給関係の変化に対応して花柳界内部の関係性は柔軟に再編されている。

ところで、売春防止法施行（昭和32年）以前は、法的には、〈芸〉の花柳界、〈色〉の遊廓という線引きが存在したが、現実の花柳界と遊廓では、「不見転」のように客の誰とでも性的関係を持つ芸妓や、「大手遊廓」のように所属する芸妓に「泊まり」を強いる置屋が存在するなど、〈芸〉の花柳界の内部にも〈色〉が混在しており〈芸〉の花柳界と〈色〉の遊廓は「地続き」となっていたといえる。

売春防止法の施行以降、遊廓という〈色〉は廃止となったが、その一部は〈芸〉を隠れ蓑に、花柳界のなかに潜り込み、生き残る場合もあった。また、〈色〉としての「若さ」を重視する見番が出現するという現象もみられた。これらのことから、花柳界を取り巻く〈芸〉と〈色〉という二元的構造は、売春防止法施行以降も、持続していたといえる。

しかしながら、昭和50年代から、諏訪湖沿岸地域の花柳界は、芸妓をやめてスナックやバーへ転向する者の増加、「コンパニオン」の台頭、若手の芸妓不足、趣味の多様化や接待の変化に起因する客の花柳界離れから徐々に衰退していった。この衰退をくい止めるため、〈芸〉の花柳界は、コンパニオンという〈色〉に対抗し、コンパニオンと自らの中間に「諏訪女子宴会サービスクラブ」という存在を置いたが、結局花柳界を離れた客足は戻ることなく、衰退の一途をたどった。

なお、今回主に取り上げた上諏訪の花柳界の見番、「諏訪大手芸妓協同組合」は、時代の趨勢から、2004（平成16）年に解散することとなった。

しかし、2006（平成18）年10月、ある人物の支援を受けて再建が行なわれ、翌年6月には「諏訪大手見番協同組合」と改称し、新たに発足することとなった。その後、見番は屋形船の復活や「諏訪大手見番邦楽学園」を開始するなど、精力的な活動が数々みられる。これらの花柳界再活性化をめぐる活動については、また別の機会に取り上げたい。

付記

本研究は、2013年度関西学院大学先端社会研究所リサーチコンペに採択された研究計画に対する助成によって実施した。調査にあたり、調査にご協力いただいた小川哲夫氏、小林悦子氏、松澤正男氏、鈴木幸子氏をはじめとする多くの皆さんに心より御礼申し上げる。

参考文献

- 浅原須美, 1998, 『夫婦でいく花街 花柳界入門』小学館.
- 伊東慎一, 2000, 「昭和のふるさと40 湯の街昭和初めの面影をしのぶ」『生涯学習しもすわ』発行元不明.
- 「大手町誌」編集委員会, 1997, 『大手町誌』「大手町誌」編集委員会.
- 小川哲夫, 2007, 『小川哲夫 昭和ロマンの一代記』郁文舎印刷所.
- 加藤政洋, 2005, 『花街－異空間の都市史－』朝日新聞社.
- 高知市史編さん委員会編, 2014, 『地方都市の暮らしとあわせ 高知市史 民俗編』高知市.
- 五味敦史, 発行年不明, 『茅野区の「芸妓火の番料」の徴収について』発行元不明.
- 澤村明, 2012, 「花街の新しい試み－東京神楽坂『粋まち』と新潟『柳都振興』－」『新潟大学経済論集』92, 201-210.
- 島村恭則, 2014, 「高知の花柳界」『地方都市の暮らしとあわせ 高知市史 民俗編』高知市史編さん委員会編, 高知市.
- 諏訪教育会, 1986, 『諏訪の近現代史』諏訪教育委員会.
- 竹中聖人, 2006, 「歴史的環境としての花街とまちづくり－北野上七軒を例に－」『Core Ethics』2, 153-164.
- , 2007, 「花街の真正性と差異化の語り－北野上七軒と五番街－」『Core Ethics』3, 249-259.
- 藤森弘子, 2007, 『まぼろしの花街 大手』長野日報社.
- 増田小夜, 1957, 『芸者』平凡社.
- 松川二郎, 1929, 『全国花街めぐり』誠文社（『近代日本のセクシュアリティ』22（色街・遊郭2）,（風俗からみるセクシュアリティ）, 井上章一編, ゆまに書房, 2007）.
- 南博編, 1993, 『近代庶民生活誌』14, 三一書房.
- 宮坂寛二, 近村捷雄, 岡村哲郎, 1997, 「大手今昔」『大手町誌』, 「大手町誌」編集委員会.
- 宮坂武男, 1979, 「昭和恐慌期における諏訪の商業（一）－諏訪市の商業について－」『諏訪近現代研究紀要』9, 134-160, 諏訪教育委員会.
- 南信日日新聞, 1986, 「かみすわ温泉花柳界今昔」1-21, 『南信日日新聞』1986年1月25日～2月18日, 南信日日新聞社.

参考 URL

- 諏訪大手見番協同組合, 2013, 「上諏訪『諏訪大手見番』」, 諏訪大手見番協同組合（2014年11月25日閲覧, <http://park3.wakwak.com/~kenban/>）.

“Art” and “Sexuality” in the Regional Society of Geisha :
The case study of Coastal Area at Lake Suwa

TANIOKA, Yuko
(Kwansei Gakuin University)

Abstract

There have been formed the societies of Geisha, called “Karyukai”, at many parts of Japan before or after meiji period.

However, most studies of geisha have focused on the case of Kyoto and Tokyo, there were hardly anyone take the regional society of Geisha as an object of study.

In this article, we show that the change of the regional society in Kamisuwa, Simosuwa, Okaya and Chino, especially pay attention to the shift of dual structure among “art” and “sexuality” before and after the Anti-Prostitution Law at the cities.

Key words : Regional society of Geisha, Geisha, Art, Sexuality, Coastal Area at Lake Suwa